
Battle Santa

光臣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B a t t l e S a n t a

【Nコード】

N 6 0 6 8 Z

【作者名】

光臣

【あらすじ】

サンタクロースが主人公のファンタジー物です。笑い少々、シリアス少々、RPG要素少々に多少香辛料が加わった感じで仕上げていきたいと思っています。

前書き的なやつ（前書き）

小説初挑戦です。

誤字脱字、駄文になるかと思いますが

生暖かく見守ってくださいませ。

少しでも楽しんで頂ければ幸いです。

前書き的なやつ

今年も時期が来た。

1年に一度、子供達が夢を叶える日。

そして、家族、恋人、様々な人間が愛情を深める日。

逆に去っていく日…。

まだ無知な子供達は

「きっと自分の所にもサンタさんがやってきて、プレゼントを届けてくれる」

そんな夢を抱き、当日を迎える。

徐々に大人になっていくに連れてそんな夢も消え失せ

「サンタなんていない。寝たふりをしていたら父親がプレゼントをくれた…」

そんな現実を突き付けられ、少しずつ大人へと近づいていく…。

しかし

「良い子にしていたらきつとサンタさんがきてくれる」

いつまでもサンタの存在を信じている純粋な子供達の所へ

『サンタ』は必ず現れるのだ。

それは父親でも母親でもなく、恋人でもない

紛れもないサンタクロース。

老若男女問わず、夢を叶えてくれる魔法使い。

今年もきつと彼は現れる、人々の夢を叶える為に…。

サント

ここは一年中、雪が降りしきる極寒の大地。

腕に覚えがある冒険家はおるか、強靱な肉体を持つ戦士ですら

足を踏み入れないほぼ未開拓の土地。

ほぼ北極圏に近いため、動植物の活動もほぼ見られない。

その寒さと過酷な環境に適合できる生物は海洋生物くらいである。

そんな誰も足を踏み入れない秘境とも呼ばれる大地で暮らす

風変わりな種族がいた。

外見上は人間と変わらないが

一切の食事の類は摂らず、空気と水だけで何百年も生き抜けるのだ。

そんな異常な発達をした彼らだが

一年に一度。

必ず故郷を離れ、彼らなりの『食事』に出かける事がある。

その食事を行わなければ、次の食事の時期までには死んでしまうという

これまた変わった種族なのである。

食事と言えば

通常は何らかの食品、あるいはそれを調理してできた料理を食べる形が一般的である。

しかし、彼らの食事とは

『人々の夢や希望などの正の心を摂取する事』である。

食事をする為に、彼らは人の心を読み

その者の欲する物品を入手、または作成、望む事を極力叶える。

対価として対象の満たされた心を食するのだ。

正の心を食すれば、摂取した側も善良な心の持ち主になり

また来年も同じように、食事をする為に一仕事する。

これがX'masという

彼らが一年に一度、外界へ唯一出かける事が出来る日。

人々がサンタと呼ぶ種族なのである。

ヒゲ親父だけがサンタとは限らない

この世界のサンタの総人口は

意外に少ないと思われがちなのだが、実はかなりの数が存在する。

人間、亜人、エルフといった夢や希望を持つ

高度な生物の人口を合計し、60億とするならばその半数の30億はいる。

食事の対象はなにも人間だけとは限らず、

植物やモンスターといった言葉を持たぬ者からでも摂取する事が可能な為

新たな生物が生まれると同時に

サンタの人口も比例して増える。

生殖活動や、分裂の類ではなく

前触れなく出現、むしろ発生に近い形でサンタは生まれるのだ。

世界の種族でも1・2位を争うほどの総人口の多さから

もちろん食事の競争率も高い。

毎年、満足な食事を行う事ができずに絶命してしまうサンタも少ないのだ。

若いサンタほど仕事の経験が少ない為、要領を得られないので

激しい競争に負け、次々に命を落とす。

逆に高齢になったサンタはその分、何度も何度も仕事の経験をしている為

若いサンタよりも食事の成功率が高い。

故に、人々が運良く見かける事が出来たという

赤い服を着たヒゲっ面の爺のような姿のサンタは

間違いなくベテランのサンタであり

その目撃例も多い事から

サンタ＝ヒゲ爺という固定概念が生まれたのだ。

競争により対立、それからの戦争

食事を摂れば摂るほど彼らは仕事を覚えるのは当然だが

それ以上に、彼ら特有の『魔法』と呼ばれる技術も飛躍的に上昇する。

食事の質が良ければ良いほど、魔法技術の質も上がり

食事競争に勝てる確立も上がるのだ。

魔法例：

アラーム： 鈴の様な音を鳴らし、人々の期待度を高め、食事の確立を飛躍的に上昇させる効果がある。

サーチ： 住居などに侵入可能な出入口がない場合、壁や天井などをすり抜ける事ができる。

スルー： 気配を殺し、限りなく目視不可能なレベルにまで体を透過させる事が出来る。

食事を争い、抗争や対立するサンタも少なくない。

小さな抗争から発展し

大規模な戦争が巻き起こる場合もあるのだ。

生き残る為とは言え、過酷な生存競争を日夜強いられているサンタだが

世界の総人口は毎日約20万という単位で増え続けている為

比例し、人口を増やし続けるサンタの人口も減る事はないようだ。

近年、サンタの中でも

『正の心』は競争率が高い為、あえて『負の心』を食すサンタが急増し

赤い正装ではなく、全身真っ黒の衣装を纏った

通称『ブラックサンタ』が急増し始めたのだ。

彼らは、『負の心』を栄養としている為か、非常に好戦的であり

腹黒く、邪悪な魔法を使う。

純粋な『正の心』は非常に希少価値が高いのだが

『負の心』は今までサンタは手を出さなかった為か

純粹で尚且つ凶悪な心を手に入れるのは容易い事もあり、

質が良ければ魔法の質も上がるという特徴から

ブラックサンタ勢が優勢なのは言うまでもない。

現在、サンタの世界では

『正の心』を重んじる派閥『サンタクロース』と

『負の心』を重んじる派閥『ブラックサンタ』が対立を起こし

交戦状態が続いているのだ。

外界に赴く前に必ず一度は大規模な勢力戦が繰り広げられる。

その日は食事の日の前日。

『イブ』と呼ばれるサンタ達にとっては最悪な日なのである。

競争により対立、それからの戦争（後書き）

世界観が長つたるくて申し訳ございません。

次からは本編に移ります（汗）

名前を持たないサンタ

自然発生すると言っても過言ではないサンタの生態は彼らに血の繋がりの家族と言った概念を持たせない。

生まれた時から一人で生き抜く最低限の力と知恵を持っているのだ。

しかし、いくら故郷で生活するとは言え

一人の力ではなんともならない場合もある。

最悪な場合、

生まれた瞬間に好戦的なサンタから攻撃を受け

消滅してしまうケースも少なくはない。

まさに運も生き残るには必要不可欠な能力なのである。

幸いな事に良心的なサンタの集落の傍で生まれた者は

なんとか食事の時期までは生き残る事を約束されるのだが

それぞれの集落では、やはり生き抜くために

厳しい掟が存在するようである。

今日もまた

サンタが住む大地、『アークチック』に新たなサンタが発生した…

生まれたときから赤い服を纏い

赤い帽子を被り

赤いブーツを履いている姿。

最近は輪廻の関係で

生まれた時から全身真っ黒の衣装に包んだサンタも発生するらしいが…

このサンタは赤。

つまり、発生した時点では

『正の心』を栄養にする『サンタクロース』に該当する派閥である。
サンタ達には交配や生殖機能は存在しないのだが、性別はある。
食事を摂る場合、大抵は男か女かで対象が2種の性別を持つ為
それに合わせてサンタも性別を分けたのだと思われる。

遠慮という言葉を知らない豪雪。

吹雪の中に赤が目立つ。

次に特徴的なのは腰ほどまである長い髪。

全体的に露出度が高い衣装。

傍から見れば物凄く寒そうに見えるが、

寒さに対する耐性は生まれつき非常に高い。

ぱっと見ただけでこのサンタは『女』である事がわかる。

初めてみる景色、吹雪にも全く動じず

平然とどこへ向かうか模索しているようである。

親という者はサンタの世界に存在するはずもなく

自分の名前はおろか、自分の家族や仲間も知らず

ただわかるのは、己の目的のみ。

（まずなにをすればいいのか…）

彼女はやや途方にくれたような顔で

あたりを見渡している。

生まれた瞬間から孤独という耐え難い試練を受ける

一人でも生き抜く力を

己で身につけなければならないサンタならではの苦行であった。

世の中運があればなんとかなると思う

吐いた息に含まれる水分も一瞬で凍りつき

まるで宝石の様にキラキラと光沢を帯びる。

辺り一面真っ白な白銀の世界。

太陽の光は、空を覆う厚い雲の隙間から差し込みはしているものの積雪に反射し、より一層白さを強調する。

方位磁石などもってはいない彼女は方向感覚も麻痺し

一応、まっすぐ進んでいるようではあるが

実は同じ場所をぐるぐる回っているのではないかと思われる。

もし、彼女がサンタでなければ

この全てを凍りつかすような寒さと

真横から、真上から、あらゆる方向から吹き付ける吹雪に耐え切れず

確実に遭難、もしくは命を落としているであろう。

進む方角も安定しない、かと言って動かなければなににも始まらない。
彼女の生存本能は自然と足を前に運ぶ。

だが、些細な振動や気温の変化で雪崩が起き易い山の傍は避け
偶然発見した木の棒で前方を確認しながらの歩き方。

さすがはサンタといったところである。

生まれて早々、雪崩やクレバスに巻き込まれ命を落とすわけにはい
かないと

体が既に生存本能として彼女に教えているようである。

一体どれほどの時間が経ったのかわからないが

休憩を挟みつつではあるが

確実に体力がすり減らされていく。

いくら寒さに強いとは言え

長時間、外気に晒されていれば体力も奪われる。

一体何キロ歩いたのか、距離を測る術もあるわけがなく

実は生まれ落ちた場所からそれほど進んでもいないのではないかと
いう

不安にも駆られる。

一向に天気は安定する気配もなく、

容赦ない吹雪がまるで煙のように舞い、視界を奪う。

（まずは集落を探さないと…）

なんにしてもまずは、ゆっくり体を休められる場所の確保。

これが最優先である。

しかし、地図もなにもない状態では

視界の3メートル先からは、もはや白一色であるこの大地で

集落を見つけるなど、

真っ暗な部屋の中で落としたコンタクトレンズを探すようなものである。

まあ… ほぼ無理に等しい行為であることには変わりはない。

運という能力がないサンタは大抵この辺で

襲われるか体力がなくなり消滅するかのどちらかで

サンタの基礎能力が試される第一の試練のようなものである。

辺りを見渡しながら、彼女は休憩を取りながら体力の回復を待っていた。

相変わらずの吹雪だが、時間によっては若干

視界が空ける時があることを学習したようで、その時を待っているようだ。

（ん…あれは…）

突如、彼女の視線の先には

うつすらと赤い点が見えた。

自分が着ている衣服と同じ色の赤。

白と赤と灰色…彼女が生まれ落ちて初めてみた色の中で

最も安心する色である赤の点。

自分の視線の先に何者かがいるという事は瞬時に把握できた。

ついさきほど生まれてから

今までずっと探し求めていた色である事に間違いはなかった。

会話のドッチボール

迷わず目先の赤い点に向かって走り出した。

目標である赤はいくら視界が悪くても見失うはずもなく

真っ直ぐ視界に捉えられる。

向こうも近づいてくる彼女に気付いたらしく

走るよりも更に早いスピードで近づいてくる。

こういう時、人は「おーい！」など叫び声を出して

自分の存在をアピールするものだが、彼女はそんな事も知らず

ただ真っ直ぐ走っているだけである。

「……………お……………い……………！」

前方の赤い点の方から始めて聴く音が聞こえた。

吹雪の音ではなく、なぜか安心できる音。

初めて聴いた彼女は少々驚いたが

敵意のような物は感じなかった為、更に走る速度を上げる。

「こんなところに一人でいたら危ないよ…?」

合流し、二人は対話できる距離まで近づいた。

彼女の視線の先には、自分と似たような衣服を纏い

見たことない乗り物に乗り、前方にはやはり見たこともない動物がいた。

自分の姿も把握できていない彼女は、

おそらくはこの前方にいる動物と一緒にの形をしているのだらうと理解し始めた。

「あゝ…もしかして…生まれたばっかなのかな?」

一方的に目の前の動物は、自分に向かって音を投げかける。

その意図や、意味を理解できない彼女はどうしたらいいのかわから

ない。

なにしろ初めて聞く音であり、対処の仕方わからないからだ。

「大丈夫！始めはみんなそうだったから！とりあえずここは危ないから…」

目の前の動物は自分の隣を空け、ポンポンと手をそこに上下させている。

「集落まで連れてってやるから…ここ乗りな？」

大袈裟なジェスチャーを織り交ぜながら、乗り物に乗るように催促する人物。

彼女は首を傾げながら、一体この人物はなにを伝えようとしているかという

真意を探るが…

敵意や悪意が感じられない事から、信用できると確信した。

おそらくは隣に來いと伝えようとしているのだろうか、彼女は理解し

なんとかその乗り物に乗りこんだ。

「しかし…女のサンタとは…珍しいなあ…きっとみんな優しく教えてくれるよ」

一方的に音を発する人物の口元を見ながら

もしかしたら自分も同じような音を発する事ができるのではないか
と思い始めた。

自分の足で走るよりも早く

しかも快適な乗り心地な乗り物にも驚きを隠せなかったが

どうすれば自分の感情や、思いを伝えられるか

彼女は頭をフル回転させ、必死に考えているようだ。

風を切る音がうるさく、先ほどまでやはりわからない音を発していた人物だったが

音がかき消されよくわからない。

しかし、彼女は食い入るように口元を見つめながら

その真似をする事から始めているようだ。

「一度覚えたらもう忘れないから…焦る事ないよ！」

彼女の気持ちを察してか、この人物は優しい言葉をかける。

意味もなにも通じてるはずもないとわかってはいるようだが

それでも彼女を励ますようにひたすら一方的に言葉を投げつけている。

前方から突風が吹き荒れ

油断していた彼女の帽子が宙に舞う。

「……………あ……………」

彼女の口から初めて音が出た瞬間であった。

学ぶとは誠実を胸に刻むこと

「ごめんな…僕はまだ『リスニング』の魔法が使えないから…」

魔法：リスニング：相手の思ってる感情や、欲求などを感じ取れる。

言わば読心術のようなもの。

先ほど吹き飛ばされた帽子はすぐに回収され、彼女に戻された。

疲れた彼女を気遣ってか、この人物が拾って届けてくれたのだった。

孤独から救ってくれた他に

自分の印、唯一自分に与えられた品物を届けてくれたこの人物に対して

彼女はなにか温かい物を感じた。

こういう時、人は一体なんて言うのだろうか。

彼女はもじもじしながら、彼が自分にそうしたように

なんとかジェスチャーも交えながらなにかを訴えようとしている。

彼の目を見ながら、帽子を指差し

「……………あ……………あ……………う……………」

言葉にはなっていないが必死になにかを訴えている。

そんな彼女の仕草を見て彼はちゃんと、なにを伝えようとしていたのか

なんとなくわかるような気がしたようだ。

「ああ…そういう時はね…『ありがとう』『っていうんだよ…』」

しっかりと彼の口元を凝視し、形を記憶する彼女。

何度も口をパクパクさせ、なんとか音を発しようとして試行錯誤する。

「あ…………い…………あ…………と……………」

なんとか出てきた言葉。

しかし、まだ言葉というには粗末で

よく耳を傾けなければ、聞き取れないレベルの音であったが

彼はしっかりと聞いていたらしく

「どういたしまして！」

屈託のない笑顔でそれに応えてくれた。

まだいろんな言葉がわからない。

しかし、彼の笑顔は言葉はわからなくてもなんとなく思いが伝わった。

彼女はそんな笑顔を見て

自分も無意識のうちに笑顔になっていた。

会話とも呼べない代物だが

初めて相手との思いのやりとりが

言葉という音で成立した瞬間であり、彼女にとっては大きな一歩となった。

嬉しいという気持ちと同時にもっと意思の疎通を味わいたい。

もっと知りたいという気持ちが高まっていった。

サンタはそういった感情の昂りや、純粹な嬉しさ、悲しさ、怒りなどで

独自の能力が開花する場合がある。

魔法であることには変わらないが、これも彼らなりの

生きていくための手段、つまり環境適応力とも言えるのだ。

彼とのやり取りの中、彼女は初めての感情や、感情の昂りを感じ自分でも知らないうちに一つの魔法を覚えていたのだった。

魔法：トーク： 自分の思ってる感情や思いを
相手の心に直接伝える事ができる。

しかし、魔法の使い方もわからないので

彼女はその魔法を覚えた事すら気付いていない。

だが、彼はすぐに彼女が魔法を覚えた事を察する。

魔法が使えるものは、相手の魔力を感じる力に長ける為

魔力の強さの度合いによって、具現化された光などを感じたり見る
事が可能なのだ。

「なにか…魔法を使えるようだね…魔法の使い方を教えてあげる

よ……………」

言葉などの表現などとは違い、魔法はジェスチャーで簡単に伝える事ができる。

集中力がいる為、彼は一度乗り物を止めて彼女に自分の真似をするように

なんとかジェスチャーで教えていく……………」

少1時間ほど粘った甲斐があつて

彼女は自分に宿る魔力を集め、魔法の発動までできるようになった。

まだ彼女の魔力は低く、十分な発動とは呼べないが…

覚えただけの魔法：トークを使い

彼の心に直接気持ちを伝える事ができた。

彼の心に直接伝わった言葉は

たった一言『ありがとう』だった。

帰れる場所

彼女は魔法：トークを覚えた事により

現在、乗り物で彼も暮らしているという集落へ向かう最中で

彼は言葉を発し、彼女は心に訴えるという会話を成立させながら

移動している。

彼女もあまり魔法：トークばかりに頼っていては

いつまで経っても言葉の発声法などを覚えないと感じていたので

ところどころ発声法の練習を織り交ぜながら

それなりに気を許せる仲になっていたのだ。

「でも驚いたよ！生まれてすぐに魔法を覚えるなんて…」

（それって…珍しい事なの？）

「うんうん！絶対に君は魔法の資質が高いんだよ！僕が保障する
！」

（でも…私もよくわからないよ…これが最初で最後のまほー？に

なるのかもしれないし…)

「あまり悲觀的に考えるのはよくないよ…魔法っていうのはきっかけさえあればすぐ覚えるさ!」

「……………ひ……………か……………んて……………き?」

「んーなんて説明すればいいのかな…後ろ向きにならないでってことだよ!」

(わかった…がんばるようにするよ)

そうこうしている内に、二人の視界の先には小さな建物群が出現した。

彼が言っていた集落であることには間違いないようだ。

遠めでもポツポツと赤い服をきたサンタが

なにかをしているのがわかる。

「ほら!あそこだよ!まずは長老のところに連れてってあげる!きつと歓迎されるよ!」

真っ直ぐな笑顔を見せる彼は、彼女の肩を叩き

彼女も視界に集落は収めているのだがそれでも

集落の方を指差し、嬉しそうに感情を昂らせている。

サンタは、生まれた場所が集落の中という事自体が珍しく

かなりの確立で人里離れた雪原や、険しい山岳地帯で発生する事が多い。

数々の説があるが、おそらくは

何年、何百年もの昔、そこで命を落としたサンタの魔力により再び発生しているのだろうと言うのが定説になっている。

大抵のサンタは故郷はない。

しかし、運よく最初の集落を発見した場合

そこを自分の故郷と決めるサンタが大半である為

実質的にその集落で永住するサンタは多い。

集落に到着した二人は、彼の先導の元この集落の長と呼ばれるサン

タの家へと向かった。

彼が言ったように、長は快く彼女を受け入れてくれ、この集落での生活を許可してくれた。

しかし、この集落でも少々厳しい掟はあるらしく

それに従わない場合は追放される事も覚悟しておけとの事であった。

「生まれたばかりでお疲れじやろう…今日はゆっくりと休むがい…確か空き家が…」

「ありがとう…」

「あまり畏まらなくても良い…この集落はもうそなたの故郷じゃ

…」

「ふ…る…さと…と…?」

「そなたがいつでも帰ってこれる場所じゃ…」

「ごめんなさい…わからない…」

「ほっほっほっ…今はわからないじやろうが…そのうちわかる

…」

「そのうち…でも…私は…知りたい…」

「あまり一日でなんでも知ろうとするのは毒じゃ……簡単なことから少しづつ覚えていけば良い……」

（言葉を発するのは疲れます……）

「ほっほっほ……言葉も今日覚えたてのようじゃからのお……ではもう一つだけ簡単な事を教えよう」

「はい……」

「おかえり、と、ただいま、じゃ……」

（それは2つでは……）

「いいや……この言葉は2つで1つ、どっちか片方だけ覚えても意味がないのじゃ……」

（難しい……）

「いやなに……簡単じゃ……誰かが集落に帰ってきたら『おかえりなさい』と言っ……」

自分が集落に帰ってきたら『ただいま』と言っ……たっただけじゃよ……」

（どんな意味の言葉なの？）

「それも……もう少し長く生きたらわかるようになる……とりあえず言葉だけは覚えておきなさい……」

「はい…」

彼女は一日で膨大な情報量を記憶したため

そろそろ精神的にも肉体的にも

限界を感じ始めるほどに疲労が溜まってきていた。

「では改めて歓迎しよう……おかえり……新たなサンタクロースよ……」

「たっ……た……だい……ま……」

彼女はまだ理解する事は出来ないが

奇跡的に生まれた日と同時に

彼女の帰れる場所、つまり故郷が出来た。

この嬉しさはまだわからないだろうが…

これから先数十年も経てばきっと彼女も理解する事になるであろう。

ありがとっつて言われたら誰でも嬉しい

翌朝。

彼女はやや騒がしい音で起床した。

前日は、長話を聞いた後、与えられた家についた後

かなり疲れが溜まっていたらしくすぐに寝てしまったらしい。

空き家ではあるが内装はしっかりと家具が揃えられ

時計や、一日毎に勝手に日付が更新される不思議なカレンダーまで設置してある。

まるで彼女がこの村に来るのを知っていたかのような

用意周到さであると思わざるを得ない感想だったらしい。

だが、彼女はそんな難しい事を考える間もなく、

家の外の様子が気になり、すぐに身支度をして家の外へ出た。

「お！起きてきた起きてきた！」

「おー！君が新しいサンタかあゝ！」

「おっ…女だぞおい！女！！！」

（おはようございます……）

言葉を発するのはまだ慣れていないらしく

とりあえず目に留まった全員に魔法：トークによる

心への直接的な挨拶を試みたようだ。

「うおー！トークだぜこれ！」

「うそだろお……生まれたばかりじゃないのかよ！！！」

「おいおいおい……こりゃあ……すごい逸材だな……」

自分が唯一使える魔法：トークで挨拶した事により

周囲のサンタは驚きを隠せない表情をしている。

（使うべきじゃなかったんだろうか……）

驚かれる事に対してもそうだが、一度に複数の相手と会話をする事は

彼女にとってはもちろん初めての体験である為

非常に困惑した表情を浮かばせる。

「こらこらこら！！あまり彼女を困らせちゃだめだよ！」

すぐ近くから聴きなれた声が聞こえた。

昨日彼女を拾ってくれた彼が、他のサンタを抑制しに現れたのだ。

「おっ…お…は…よう…っ」

ぎこちないが徐々に聞き取れるレベルにまで

言葉の発声は進歩している。

「おはようー！よく眠れたかな？昨日、長から聞いたと思うけどさっそく掟通りに…」

（一度に、2つも話題を変えられると…）

「ごっ…ごめんごめん！今からさっそくこの集落の修練所にきてもらっけど…平気だよな？」

（修練所？）

「サンタとして最低限の魔法を覚える為の場所だよ…掟にもある…」

「きの…う…村長さ…ん…も…たし…かに…
…言って…た…」

「うん！その場所を案内するね！着いてきて！」

「はい…」

「はいはい！みんなも修練所にいこうね！」

今日も相変わらず、彼は生き生きとした表情で

彼女には爽やかな笑顔を送る。

そんな彼の性格や優しさは、今の彼女にとっては非常にありがたい
ものであり

唯一、緊張しなくても良い相手だと断言できるのだ。

（ありがとう）

彼女は彼から教わった『ありがとう』という言葉がすごく気に入っ
たらしく

彼からなにか教わったりするたびに意識して多用するようにしている。

彼も彼女から『ありがとう』と言われるたびに

更に優しく、尚且つ親切で丁寧に事を教えてくれるので

満更でもない様子なのは明らかだ。

修練所は意外とすぐ近くにあった。

彼女に与えられた家から歩いてほんの4～5分の場所にあった。

なかなか大きな建物で

ぱつと見50～60人は余裕で収容できるほどの規模である。

先ほど彼がちらつと言った言葉

『サンタとしての最低限の魔法』がすごく気になり始めていた彼女だが

これからいろいろ教えてもらえる事に対してワクワクしている。

「んじゃ…僕は中等教育だから…案内できるのはここまで！」

「ちゅ…う…とー…?」

「生まれたばかりのサンタはまずは初等教育から学ぶんだ！そこで初期魔法や、

いろんな言葉を学べてすぐにトークを使わなくても良いくらいに、会話が上達するよ！」

（それは楽しみだ…私も早く、君と言葉でいろいろ会話したい…）

「そう言ってくれると嬉しいよ！大丈夫！君ならすぐに中等までこれるよ！」

「が…んば……る…！」

「初等修練所はこのドアからずっとまっすぐ言ったところだから！迷わないと思うよ！」

「あ…りが……とー…」

「頑張つて！」

彼との会話もそこそこに、彼女はさっそく初等修練所へと赴いた。

プレゼントってなにそれ美味しいの？

彼女の目の前には、

『初等』と書かれた立て札がかかっているドアが立っている。

躊躇なくドアを開いた。

意外と初等が集まっているサンタが多い事にびっくりした。

ここに集まっているサンタはほとんど自分と同様に

生後1週間も経っていないサンタばかりだ。

なんとなく親近感を持った彼女はとりあえず開いている席へ着席した。

やはりまだ言葉による会話を楽しむというレベルまで

発声法が上達していないサンタが多く

教室はどんよりとした静けさを醸し出している。

しかし、

彼女も魔法は使えるので

高い魔力を秘めている者は何名かみつけることができた。

彼らも同様に自分が魔法を使える事は

すでに確認済みらしく、何回か目線がぶつかる事が多かった。

なにか違和感を覚えた彼女はもう一度あたりを見渡す。

先ほど外で

自分が『女』という性別だという事に対して驚いていたサンタがいた意味が

ここでなんとなく理解できた。

初等にいるサンタは自分以外全員『男』だからだ。

それほど、女のサンタというのは珍しいという事なのだろうか

彼女は眉を潜め、なにか考えを巡らせるが

考えても自分にはわからない理があるのだろうと言う結論に達し

これ以上難しい事を考えるのは止めようと、考える事はストップした。

目の前には大きな黒板、その近くに教壇があり
まるで学校のような内装を髣髴させる。

しかし、装飾は見事にクリスマスを匂わせるツリーや
リースや電飾が施されている。

なかなかお洒落な教室だなと彼女は僅かに微笑を見せた。

なんの前触れもなく、一同の目の前に教師らしきサンタが立っていた。

教壇の近くには誰もいなかったはずなのだが、気付かれる間もなく一瞬にして

そこにずっといたかのように立っている。

明らかにここにいるような若いサンタではなく、ベテランのサンタであると目視でわかる。

「はーい！みなさんも気付いてるかと思いますが、今日も新しいサンタが来ています」

透き通った聞き取りやすい声で、軽く一同に今日入ったばかりの彼女の紹介を手早く済ませた。

「よ……ろ……しく……おね……が……しま……す……」

振り絞るようになんとか言葉で挨拶をした彼女。

やはりまだ発声は慣れていないので

非常に聞き取りにくい言葉だったが

それでもなんとか言葉で挨拶を交わした事に一同は賞賛し

惜しめない拍手が送られた。

「はい！では新しいサンタに先生からプレゼントです」

（プレゼント？）

聴き慣れない言葉に彼女は思わずトークで先生に問い返した。

「プレゼントとは…サンタには必須な情報であり一番重要な事柄

です。

相手の気持ちを理解し、相手が今一番なにを欲しているのかを察し

相手を喜ばせる事が出来る贈り物です」

（よくわからないけど…すごく大事なのね…）

「そのとおり！今貴女が一番ほしいものは…まだプレゼントできませんが…」

「この集落で生きていく以上！貴女には呼び名が必要です！先生がプレゼントしてあげます」

「よ…び…な…？」

「心配いりません、初等の授業内だけで使う呼び名ですから…」

（呼び名とはなに？）

「固有名詞を表す言葉で…名前のようなものです…まあそれは追々説明します…では…」

言葉とトークで会話をしている二人を

不思議そうに見つめる他のサンタ。

なんでこの先生は一人でベラベラと喋っているのだらうと

頭の中がハテナでいっぱいになっているのが大半のようである。

「はい！決まりました！貴女の呼び名は『クリス』です！
皆さん！彼女をこれから『クリス』と呼んでくださいね」

「く……………りす…」

不思議となぜか知っているような言葉…

彼女は少し照れながらも

特別な気分になり、やや顔を赤く染めていたのだった。

魔法よりなによりまずは会話術

初等では、まず魔法よりも言葉による会話を先に教え

スムーズに会話が成立したら合格。

その後、やっと魔法を教えるとの事。

しかも、初等で教えてもらえる魔法はたった一つ。

だが、サンタにとっては3種の神器とも呼ばれている魔法の一つであるらしい。

黒板に50音全ての文字が（この世界の言語は日本語）書かれ

一文字づつ発声していく、

それに慣れれば次は、先生が適当に指した文字を発声する。

まるでアナウンサーかなにかの学校のように

教室全体に初等の一同の声が響き渡っていた。

中には早々とその授業をクリアし、会話の練習にまで発展しているサンタもいる。

クリスはどうも『ラ行、ザ行』が苦手であるらしく、どうしてもまだコツが掴めていないようだ。

だが、何度も何度も発声し、先生からの確かな発声法を教えてもらうに連れて

集落に着たばかりの時よりも遥かに

言葉を操る術に慣れてきているようだ。

2時間授業、30分休憩のサイクルで延々と会話術を学ぶ。

授業の中で先生も古代の偉人の言葉や、ためになることわざなども教えてくれるので

会話の質や、言葉の意味も自然と覚えてきているようだ。

「クリスー疲れてない？」

「うん…まだへーきだよ…ロキはどう？」

「僕もまだまだへーきだ！お互い頑張ろうな！」

「うん！そうだ…ね」

などと他のサンタとも少しづつ会話しながら

クリスは確実に言葉を覚えていった。

「言葉にはコミュニケーションを円滑にする他…実は魔法の習得率にも影響があるのです」

「より高度で繊細な魔法を扱うには、詠唱と言つ言霊を放つ技術も必要になります」

「えい……しよ？」

「言だ…ま？」

先生が聞きなれない単語を使うと途端に一同はポカーンとしてしまうが

それもそのうちきつとわかるようになると自分自身に言い聞かせ、

早く魔法の習得に移りたいというサンタが大半のようだ。

初等のサンタ数は約20名。

やはりクリスが一番年齢的には低いが

20名中12番目に会話もなんとか合格した。

あとは練習よりも会話を繰り返し、慣れれば問題なく日常会話ができるレベルである。

残りの8名もとりあえずは会話の練習には移っているようなので

他12名はやっと魔法の授業に入る事が許可されたのだった。

やっとサンタらしい授業が受けれる喜びも感じていたが

クリスは早くこの授業が終わって

自分を拾ってくれた彼とおしゃべりを楽しみたいという気持ちでいっぱいのだ。

サンタが鈴を鳴らす理由

やっと魔法の授業に移った。

先生も話していたようにこれから習う魔法は

サンタにとっては3種の神器と呼ばれる魔法で

なくてはならない魔法らしい。

一体どんな魔法なのか非常に興味深そうに

クリスは目を輝かせている。

「では…会話のテストが終わった子達は注目〜！」

「これからかなり重要な魔法を教えます」

いよいよ先生が動き、12名に妙な器具を手渡し始めた。

クリスにもそれは渡され、少し揺らしただけで

なんとも耳に優しい金属音が鳴る物であった。

「はい！魔法の説明をします。これから教えるのは『アラーム』と呼ばれる魔法です」

「今手渡した物の音を覚え、魔力を音に変化させる技術が必要ですが…」

「魔力を変化させるという技術は全ての魔法に応用できる基礎のようなものです」

「焦らずゆっくり身につけていきましょうこれから方法を教えます」

先生は鈴を手に持ち、精神を集中させ魔力を徐々に開放させていく。魔力が少ないものでも、先生の魔力のオーラはすぐに感じ取れたようだ。

うつすらと魔力のオーラが見え始めた。

「この鈴の音のイメージが大事です。いきなり音に変化させるのは難しいので」

「まずはこの音の色をイメージします」

先生の魔力のオーラが徐々に色彩を持ち始める。

同時に一同の耳に優しい鈴の音が聞こえ始めてきた。

初めて聴く音ではあるが

なぜか心が落ち着くような、いつまでも聴いていたい感覚に包まれる。

クリスも思わず目を瞑りその音に耳を傾けている。

かなりリラックスした表情で聴き入っているようだ。

「はい！では皆さんやってみましょう！」

鈴の音が止まり、いよいよ練習の時間となった。

まずは渡された鈴の音を覚える事。

これが先決であり、一同は一斉に鈴を鳴らす。

覚えやすいように耳元で鳴らすサンタもいれば

目を瞑り、ゆっくと音を拾うサンタもいる。

「とか言われてもなあ…僕は魔力の使い方わからないのに…」

「じゃあ私が教えてあげようか？サタン」

「本当かい？頼むよクリス」

重要なのは何度も何度も練習して

無意識に魔力を集中させる事。

互いに教えあい、魔力を扱う技術を身につけ

共に喜び、達成感を味わう事。

人々に喜びを運ぶという仕事をこなすサントには

必須とも言える感情である。

どうすれば相手が喜ぶか、相手の喜びも自分も喜びとして

自然に受け入れるのが非常に大事である。

サンタが鈴を鳴らす理由は

人々の期待度を高め、食事の確立を上昇させるためだけではなく

初めてアラームを教わった時の授業を思い出し

初心に戻り、喜びを共感する為という意味も含まれているのかもしれない。

魔法：アラーム：鈴の様な音を鳴らし、人々の期待度を高め、

食事の確立を飛躍的に上昇させる効果がある。

サンタクロースが最初に教わる魔法。

応用すれば全ての魔法を習得する事も可能。

サンタの魔法の基礎とも呼べる魔法である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6068z/>

Battle Santa

2011年12月21日10時52分発行